

ロームシャの孫と曾孫を愛す

北海道恵庭市 佐々木 晋

「ママは絶対に許してくれないでしょうね」

インドネシア人の恋人は、涼しい顔をして爆弾宣言をした。

私たちは結婚の約束をしていた。いよいよ親の承諾を得るという段になって、とんでもない事実が彼女の口から飛び出したのだった。

「ど、どうして？」

「あなたが日本人だからよ」彼女は平然としてそう言った。「実はね、私の祖父、つまりママのパパが、ロームシャとして日本軍に連れて行かれて、そのまま帰ってこなかったの」

日本占領時代、強制連行されて過酷な労働を課せられた「労務者」と呼ばれる人々がいた。主にジャワ島から強制的に徴用された労務者はマレー半島や太平洋の島々まで連れていかれた。約四百万人が労務者として徴用されたと言われている。そして、徴用されたまま帰ってこないなど多くの犠牲者を出した。

まさか彼女の祖父がその一人だったとは。戦争なんて遥か昔の出来事のはずだった。時は1990年、戦後45年が経っていた。まさか、自分の結婚の障害になるとは……。まるで亡霊のように付きまってくる日本の戦争。まだ「戦後」は終わっていなかったのだ。

自分は戦後生まれだから関係がない、とは日本人である以上は決して口に出してはいけないのだろう。加害者側の身勝手な論理と取られてしまう。被害者には一生忘れられない傷跡が残っているのだ。現在でもたいていのインドネシア人は「バカヤロ」という日本語を知っている。日本統治時代に日本兵から頻繁にその言葉で罵倒されていたからだ。被害者側の傷は簡単には癒されない。ましてや肉親の命が奪われている場合は尚更だ。

「そんなことがあったなら、君の母親は日本人を心底憎んで……」

そこまで言ってハッと気がついた。母親だけではない。彼女だって、祖父を奪った日本人を好ましくは思っていないはずだ。

「あなたは日本兵なの？ 違うでしょう？」

深いため息をつくよりない。それで片づけられる問題ではないはずだ。

「なんとかなるわよ」超楽観主義者の彼女がほほえむ。「二人で説得しましょう。やれるだけやって駄目だったら、悲しいけれど、ママの祝福なしで結婚するしかないわね。そのあとで時間をか

けて証明すればいいのよ。あなたが日本兵とは違うということを。ねえ、一生かけてそれを証明することができる？」

「もちろん。人生の終わりまで、君を幸せにするためには何でもするよ」

「じゃあ、なにも問題はないわ」

南国の太陽も恥じらう底抜けに明るい笑顔が弾けた。とことん楽道家なのだ。なんとかなる、が彼女の口癖だ。なんとかしなくては、と私の心は焦っているというのに。

次の日。

「日本人だけは絶対に駄目」

彼女の母親は、陰しい表情で吐き捨てるように言い放った。問答無用、というように。

「私には父親の記憶がないの。日本人が、私の人生から父親を奪い取ったんだよ」

母親は涙を流しながら辛い話をする。

「ママ、私は日本人を選んだわけではないのよ。私はこの人を選んだの」彼女が訴える。「私は愛する人と結婚したい。私が愛した人が、たまたま日本人であっても、私は自分が選んだ人と家庭を築きたい」

母親はじっと彼女を睨みつけていた。

「二人に神の御加護がありますように」

結婚式場で彼女の母親はそう祝福してくれた。日本人に対する憎しみと娘の幸福を量りにかけ、子を想う母の愛が、最終的に結婚を認めてくれたのだった。

「幸せな家庭を築くよう努力します」

そう告げるくらいしか私にはできなかった。

そう、大切なのはこれからよ。その約束を守り続けてね。彼女が瞳でそう訴えた。

初めての子が生まれた時、義母は真っ先に病室に駆けつけ、涙で顔をぐしょぐしょにして喜んでくれた。娘が生んだ私のかわいい孫。日本人の血を引こうと関係ない。潤んだ瞳がそう語っているかのようだった。私たちの子どもはまた、ロームシャの曾孫でもある。私は歴史の皮肉に必死に立ち向かおうと思う。ロームシャの子孫を一生かけて愛し続けよう。

結婚二十五年が過ぎた。私たちは二人の子どもに恵まれ、平凡ながらも幸せな生活を送っている。子どもたちは成人し、社会人として独り立ちするまでになった。

しかし、私は一生かけて証明するつもりだ。それが妻との約束だ。ひとりのインドネシア人女性を心から愛するだけでなく、平和を愛し尊敬できる日本人だと彼女の家族に見なされるように

なるのだ。たとえ長い時間がかかろうとも、平和を愛する日本人のイメージを世界の人に一人でも多く広めていきたい。